

# アレン・ギンズバーグはアメリカン・エレミアか

三宅 昭良

はじめに

ここしばらくアレン・ギンズバーグの初期の詩を読み返しながら、ある言葉が脳裏に浮かんで消え、消えては浮かびつつづけていた。「アメリカン・エレミア」<sup>1</sup>である。かのサクヴァン・バーコヴィッチが発表し、一世を風靡した概念である<sup>2</sup>。筆者もエズラ・パウンドとの関係を論じたことがある<sup>3</sup>。バーコヴィッチが本格的に論じたのはヘンリー・アダムズくらいまでだが、ある高名なパウンド研究者が詩人もまたアメリカン・エレミアだと指摘したので、その妥当性を論じたのだ。つまり、この概念は一九世紀以前のアメリカに妥当するばかりではなく、二〇世紀のアメリカ人のメンタリティを考えるうえでも検討に値するということである。実際、比較的あたらしいところでは、アンドリュー・マーフィという政治思想家が『放蕩なる国民』なる本を発表し、九・一一にいたるアメリカ人の心性を「アメリカン・エレミア」の概念で記述している<sup>4</sup>。

では、ギンズバーグの場合はどうか。少し調べてみたが、彼を「アメリカン・エレミア」だと指摘した批評家は見当たらない。それどころか、バーコヴィッチはビート派を「反エレミア」の典型のひとつとしてさえている<sup>5</sup>。そのいっぽうで、詩人も共感をもっていた公民権運動の指導者キング牧師のなかに「アメリカン・エレミア」的な言説を明らかに見て取ることができ、

とマーフィは論じている。ギンズバーグの心性はたして「アメリカン・エレミア」といえるだろうか。それともバーコヴィッチの示唆を敷衍して「反エレミア」のひとりと考えるのが妥当だろうか。あるいはこの議論の枠組みで捉えるには無理があるだろうか。以下に次の手順で検討してみようと思う。

まず、アメリカン・エレミアとは何か、バーコヴィッチとマーフィの議論を参照しながら復習する。つぎに、初期の代表的な詩を読んで、そこにみられるギンズバーグの心性をさぐる。次に彼の重要なエッセイを採りあげる。前者にはアメリカン・エレミアらしからぬ点がみられるが、後者はきわめてエレミア的である。最後に「吠える」を読んで詩人の心性をピン留めし、同時に「らしからぬ点」の意味も解決する。

## 一・アメリカン・エレミアとは

アメリカン・エレミアとは何か。それはピューリタニズムに由来する（アメリカ）の神話形成にかかわる心性のことである。バーコヴィッチによれば、アメリカン・エレミアとは、迫害を逃れてニュー・イングランドに（約束の地）を見いだした入植者たちに端を発し、そこに（神の王国）を打ち立てる理想と希望をいだし、〈選民意識〉をはぐくみ、〈アメリカの使命〉を公認イデオロギーへと育てあげたメンタリティのことである。これをマーフィは次のように要約している。第一にエレミアは過去と比較して現在を道徳的・精神的な墮落だと考え、その墮落はアメリカを破滅に導く脅威であり、アメリカをアメリカでなくする悪徳であると訴える。第二にエレミアはそのような墮落のターニング・ポイントを明確にする。墮落の原因と指標を明示し、それらをアメリカ建国の理想——ニュー・イングランド入植の第一世代のそれであれ、独立戦争の英雄たちのそれであれ——と対比する。そして第三

に、エレミアは国を正すべく行動を呼びかけ、行動をおこさなければならぬと訴える。当然ながらこのとき参照されるのは上記のアメリカ建国の理想である。そして神に選ばれし国民がこの理想から外れていると見なされるとき、論難は社会的政治的事実の摘示から世界的宇宙論的次元へと飛躍する。さらには放蕩息子に対して寛大にも赦し迎え入れる父がいるように、正道へと復帰しようとするアメリカを神は許してくれると説く。神の御心に復し、神の御心をなうのはひとりアメリカのみであり、神の大いなる計画をこの地上に実現するのはアメリカの使命である。こうしてアメリカン・エレミアは過去と現在、現在と未来のあいだに希望と展望と脅威と破壊のダイナミックな弁証法的関係を張りわたし、アメリカを神の普遍性を体現した唯一の国民と位置づける強烈な心性のことである(719)。

マーフィがこうした要約のあと『放蕩なる国民』において取り扱うのはインクリース・マザーなどのニュー・イングランド入植者たち、一九世紀前半の奴隷制をめぐる政治家たちの対立、そして南北戦争における「アメリカン・エレミア」、その後のアメリカ政治に脈々と流れるキリスト教右派の心性などである。そして後半では南北戦争以後のアメリカ史に顕在化する「伝統的エレミア」と「進歩的エレミア」の対立を析出し、将来的な後者の政治的優位を記述して論を閉じる。論中において彼は、アメリカ中産階級の支配的イデオロギーを描破したバーコヴィッチの先駆的研究の意義を賞賛するが、アメリカン・エレミアのなかにある「深い実存的絶望の感覚」(167)を過小評価していると指摘する。その点は筆者も同感なのだが、いっぽうでマーフィが政治史にしぼって議論するのに対し、バーコヴィッチは政治家だけでなく、メルヴィルやホーソンなどの小説家、さらにはソロー、エマソン、ヘンリー・アダムズなどの批評家の言説もあつかっており、文化的な広がりをも有する。さらには、バーコヴィッチにしたがえばアメリカン・エレミアには二種類あるのだが、マーフィはそのことに言及していないし、彼の言う

「反エレミア」にもふれていない。

バーコヴィッチは『アメリカン・ジェレマイアッド』において、独立革命の前後で「アメリカン・エレミア」の意味が変質したと考えている<sup>7)</sup>。独立革命以前においては「アメリカン」は「アメリカ植民地の」という意味であり、エレミアの言説は聖書とキリスト教神学がアメリカの意味を規定していた。一八世紀末以前のアメリカン・エレミアは宗教性に力点があり、「エレミア」にアクセントが置かれる。これに対してもうひとつのアメリカン・エレミアは独立直後の憲法制定過程におけるフェデリストとリパブリカンの論争におけるそれである。そこにおいて聖書とアメリカの関係は逆転し、実現すべき目標はアメリカのみがもつ普遍性であり、聖書はそのレトリックに利用された。そしてそれ以後のアメリカは国民国家の世俗的發展と展開を宗教的展望の修辞で包摂していったと指摘する。このときの「アメリカン」は「アメリカの例外／普遍主義を信じる」という意味であり、アクセントは「エレミア」ではなく「アメリカン」に置かれることとなる。こうしてピューリタニズムの枠組みは一八世紀末において宗教的信念の実現から世俗的繁栄を意味づける意匠へと変質したとバーコヴィッチは考えているのだ。したがって、彼は言及していないが、その先には修辞の希薄化と希釈化が予想される。そして同時にもうひとつのタイプの「エレミア」、すなわち「反エレミア」が出現するのである。

アメリカン・エレミアは希望と不安のあいだに絶妙のバランスをとった神学的レトリックだが、このバランスが崩れたときに「反エレミア」は出来る。このまま墮落と無原則をつづければ、待っているのは破壊である。しかしアメリカには神の計画を実現する使命があり、実現できるのはアメリカだけである。このようなバランスが崩れるとき、すなわち、(アメリカの使命)などまやかしにすぎないと考えたり、われわれはすでに引き返し可能な地点をこえてしまっていると考えたりするとき、もはや破壊を回避する

道はないと未来に対して絶望する。これが「反エレミア」の心性である（19）。聖書が自己を規定するか、自己正当化のレトリックとして利用するかのちがいはあれども、アメリカン・エレミアが未来を切り開くユートピア思想であるのに対し、反エレミアは未来の喪失と消失に沈みこむ虚無的思想である。パーコヴィッチはそのような例としてメルヴィルとヘンリー・アダムズをあげ、実際、彼の指摘するとおり、後者はアメリカに絶望して一九三八年に世界は破滅すると予測した（AJ 196）。こうしてエレミアも反エレミアも（アメリカ）をめぐって同一の問題構成を設定する。アメリカのみが神に選ばれ普遍的価値を体現し、世界の繁栄と至福を先導する。人類の幸福と救済はアメリカの足元からはじまる。ゆえにアメリカの未来に理想と希望をえがき、いっぽうでアメリカがダメならすべてがダメになるという不安のレトリックを対峙させる。彼らはいずれも（アメリカ）という例外的普遍を思考の枠組みとしており、そこにのみ理想と達成の源泉を見いだしている。

以上、パーコヴィッチとマーフィの議論をスケッチしながらアメリカン・エレミアと反エレミアについて復習した。それはキリスト教神学のレトリックをもちい、（アメリカ）に例外的普遍的価値を見いだす心性である。それは、入植時代の愚直な神権政治のイデオロギーから次第に変質し、アメリカの繁栄を正当化する「中産階級の価値観」（AJ 180）を形成したのだった。反エレミアはそうした公認イデオロギーを否定するが、同じ論理構成を転倒させて正反対の未来図をえがくのであった。さて、ギンズバーグはこれらの心性、あるいはそれらを支える論理構成とどのような関係にあるだろうか。次にいよいよ詩人の詩と散文を読んでいくことにする。

## 二. 宙づりになる詩人

もちろんギンズバーグにはさまざまなタイプの詩があるが<sup>10</sup>、多くの詩に共通するのはドラッグ、同性愛、放浪などをめぐる自伝的要素である<sup>11</sup>。アメリカの物質主義と軍事体制を批判ないし嫌悪した詩もまた多い。ふたつは表裏の関係になつている。たとえば「パターソン」は「金もうけのヴィジョンを壁紙にしたこれらの部屋で僕は何がしたいのだろうか」という詩行ではじまり、都会の日常生活の虚飾とむなしさを露悪的な言葉でえがくと「僕は気が狂いたい、暗い道路でメキシコへむかい、ヘロインを血管にしたたらせ／両目両耳をマリワナでいっぱいにし」とうたう、といった具合だ。ここで顕著なのはアメリカ社会に対する怒りと絶望、そしてセックスと麻薬の中毒のはてに殺害されることを願う倒錯的な自殺願望の表出である<sup>12</sup>。後半、ギンズバーグは自己を礎にされるイエスに重ねながら、アメリカ社会によつて「口にクソをいっばいに詰め込まれて」惨殺されることを望むのだ。ここにアメリカの未来に対する希望を読みとることはかなり困難である（CP 4849）<sup>13</sup>。

このことは「テレビはあの処刑室にむかつてゆっくり這ってゆく赤ん坊だ」でも変わらない（以下、「テレビ」と略記する）。調査ドラッグを試して興奮状態で書かれたこの詩は（*Celebrity* 325）、冷戦を遂行するアメリカ政府もFBIもマスメディアも電話回線などの通信網も、六人の億万長者がすべてを支配して世界を牛耳っているという誇大妄想狂的陰謀論を、混濁し高揚した意識のうみだす激しい言葉の衝突と渦によつてうたうという長詩なのだが、最終的にはヤハウエの怒りと原爆の炸裂が人腕類の死神を招来し、すべての存在を広大な宇宙の虚無へと吸引する夢想、そのなかで自己の肉体は映画の映写の終わりのようにリールに巻き取られてしまふ宇宙空間そのものも消失する。いわば世界のリセットを幻視する（CP 280-91）。

これらの詩を読むと、ビート派のプロテスト詩に反エレミアの典型を見るパークヴィッチの指摘は妥当であると感ずるかもしれない。しかしことはそんなに簡単ではない。ほかの詩をいくつか、その細部をていねいに読むと、ギンズバーグはもっと複雑だとわかる。たとえば、その名も「アメリカ」と題された詩はどうか。それはアメリカに呼びかけてその不実を批判し、自分の気分と境遇を吐露する詩行ではじまる。

アメリカよ 君にすべてをささげてしまい もう今の僕はゼロ。

アメリカよ 二ドル二七セント 一九五六年一月一七日。

僕は自分の心に耐えられない。

アメリカよ いつ僕らは人間の戦争をやめるのか。

自分の原爆くらって逝きやがれ。

僕は気分が悪い かまわないでくれ。(CP154:1-6)

「僕」の論難が愛国心に支えられていることは容易にみてとれよう。「自分の心に耐えられない」のも「気分が悪い」のも、その反転にほかならない。冒頭こそこうして反戦詩のようだが、このあと列挙する事例はほとんど漂流しはじめ、やがて「僕」のみじめな日常がそうした事例を圧倒してふくらんでいく。アメリカ社会のなかで「僕」は生きづらさを感じている。「僕」はアメリカの現状にけっして満足していないし肯定もしない。いやなことも多々あるし、共産主義に共感をもつ「僕」は赤狩りの吹き荒れる国内情勢も、国際社会におけるアメリカのスタンスにも反感を抱いている。そうしたアメリカの「国力」の一部をになう歯車にはなりたくないと思つてもいる。にもかかわらず、

君はきみの感情生活をタイム誌の支配にまかせせるつもりか。

僕はタイム誌にとり憑かれている。  
毎週 僕はそれを読む。

角の売店のまえをこつそり通るたびにタイムの表紙が僕をにらんでいる。

僕はそれをパークレー公共図書館で読む。

(二行省略)

ふと思う僕がアメリカなのだ。

僕はまたひとり言をしゃべっている。

(二四行省略)

さつさと仕事にもどつたほうがよさそうだ。

たしかに僕は軍隊にはいりたくないし精密機械工場で旋盤を回したく

もない近視だしそれにサイコパスだしね。

アメリカよ そんな僕でもゲイなりに頑張っているんだぜ。

(CP 155:56; 39-73)

にもかかわらず、「僕」はタイム誌をこつそり読んでアメリカの体制的価値観を吸収し理解しようとしている。自分はアメリカだと気づき、あるいは「ゲイなりに頑張っている」<sup>14</sup>とアメリカに語りかける。このような「僕」の言葉つきから読みとれるのは、アメリカを愛しているという感情、アメリカとの関係を修復したいという願望である。これはアメリカへの恋愛詩にほかならない。

「僕」をギンズバーグと完全に同一視するわけにはいかないが、それでも本作を含めて彼の詩はきわめて自伝的であり、詩人と多くを共有し彼の一面を強調した人格だと考えて差し支えないだろう。では、この「僕」はアメリカン・エレミアとどういう関係になるだろうか。

まず、詩はまったくピューリタンのではない。キリスト教神学のレトリック

クとは無縁というほかない。たとえば、先の引用において冒頭五行目を「自分の原爆くらって逝きやがれ」と訳出したが、原文は「Go fuck yourself with your atom bomb.」であり、これは明らかに男性のマスターベーションを暗示している。であるからこの詩はアメリカに対する同性愛の恋愛詩だということになる<sup>150</sup>。

しかしその点で二〇世紀の文学作品や思想の評価をあまりに厳格に縛ってしまうのは正しくない。第一節でみたとおり、一九世紀以降、神学的見地はレトリックと化しその後はさらに希薄化すると予想されたのであり、「反エレミア」が出来るのはそういう文脈においてであった。二〇世紀の文学者たちの心性をとらえるには、宗教性の有無、種類、濃淡を問うことではなく、(アメリカ)をめぐる問題構成のありようを精査することが肝要である。とりわけセックス、ドラッグ、狂気、同性愛などのテーマがあげすけな言語で頻出するギンズバークの詩の場合、そうしたテーマを志向する深奥の心性を問題にすべきである。

では、アメリカの現状についてはどうか。「僕」がそれを随落していると見ていることは明白である。「アメリカよ いつきみは天使のようになる／いつきみは服を脱いでくれる／……／アメリカよ なぜ君の図書館は涙であふれている」と問いかける「僕」は、冷酷で無慈悲で心を開かず知性を顧みないアメリカの現状に失望している。その失望がアメリカへの愛からきていることはいま確認したばかりだ。そして

アメリカよ トム・ムーニーを釈放せよ  
アメリカよ スペインの反フランコ派を救え  
アメリカよ サッコとヴァンゼッティは死んではならない  
アメリカよ 僕はスコッツボロ・ボーイズだ

(CP 155: 57-60)

どうたうとき、「僕」はアメリカに正しい道を示している。こうした点はすぐれてエレミア的である。だが、六四から六七行にかけて腹話術師よろしくアメリカの言い分を代弁し列挙する詩行の口調は野卑であり、この冷笑的で悪意さえ感じさせる態度は、エレミアにも反エレミアにもないものである。そもそもこの詩全体が、ひとつの一貫した主張を念頭に構成されたものとはいいがたく、むしろ次々と浮かぶ想念を再現した体のものである。アメリカと自己の関係というテーマはあるが、どちらかというと、気分のうえを浮動する気まぐれな思索の転写に近い。その気分は、すくなくとも詩語の表面においては、アメリカン・エレミアと反エレミアに共通する儀式的荘重と真剣味に欠けているといわざるをえない。では、パーコヴィッチの判断——ビート派は反エレミアという判断——はギンズバークには当てはまらないのだろうか。エレミア的要素のまったく見られないわけではないが、詩人はエレミア／反エレミアの埒外に位置するのだろうか。

もうひとつ、「カリフォルニアのスーパーマーケット」を読んでみよう(以下、「スーパー」と略記する)。この詩には明確な枠組みがあり「アメリカ」よりも一貫している。詩語においても「アメリカ」のそれが奔放であったのに対し、こちらは穏健で抑制がきいており、「儀式的荘重と真剣味」とまでいうのは大げさだが、それに通じる詩美をそなえている。

月の出ている夜、「僕」はホイットマンの亡霊とともにカリフォルニアのスーパーマーケットを散策する。スーパーは夜の買い物を楽しむ多くの家族連れで賑わっている。亡霊は彼にしが見えないが、『草の葉』の詩人がどんなカタログを展開するか楽しみにしながら後をつける。しかしここに登場するホイットマンは「子供のいない淋しい爺さん」であり、エネルギーに言葉をくりだすあの詩人ではない。彼は彼の時代にはなかった「冷蔵ケースの肉類をつつき、食品売り場の若い店員をうかがっている」。店員のひ

とりひとりに質問する 誰が（こんなにたくさんの）ポーク・チョップを殺したのか バナナはいくらするのか 君はぼくの天使かい」と<sup>16</sup>。とまどうホイットマンは「まぶしいばかりの缶詰の山」の向こうからあらわれたり、陰に消えて見えなくなったりし、僕は「空想のなかで店の探偵に尾行される」<sup>17</sup>。注目すべきは、スーパーから出て行くときに主語が「僕」から「僕たち」に変わっていることだ。ホイットマンの様子をはなれたところから観察し後を追っていた「僕」は、ここで物理的・心理的な距離をなくすのだ。

僕たちはいっしょに開けた通路を大またでゆく 僕たちの孤独な空想のなかでアーティチョークの味をし あらゆる冷凍の珍味を手に入れながら レジをけっして通らずに (CP144:7)

しかしスーパーを出たホイットマンは「僕」の呼びかけにこたえずに、さびしい街を歩きつづけるかに思われる。思わず「僕」は問いかける。

ああ 愛しい父よ 灰色の髭の淋しい年老いた勇気を教えてくれる人よ どんなアメリカがあなたにはあったのか 黄泉の国への渡し守の舟をすすめる手をとめさせて けむる川辺に降り立ちレテの河の漆黒の流れに舟が消えゆくのを見送ったときに (CP 144: 12)

「アメリカ」と同様にこの詩もまた〈アメリカ〉をテーマとしている。ただし、前者が「僕」との関係性を軸としていたのに対し、こちらはホイットマンの〈アメリカ〉と現在のそれとの落差を問題にしている点が問題をいささか複雑にしている。

バーコヴィッチも論じるとおり (AJ198-99)、ホイットマンもまたアメリカン・エレミアのひとりとしてアメリカの現状と理想のアメリカ、驕慢なア

メリカとあるべき姿のアメリカのあいだで苦悩し、矛盾からくる不安の解決につとめた詩人である。それは早くも『草の葉』初版（一八五五年）にかいま見え、『民主主義展望』（一八七一年）において主題化したテーマである。バーコヴィッチは他の批評家たちとは異なり、ホイットマンは現実のアメリカからアメリカの理想を抽出したとみているが、いずれにせよ、預言的幻視詩人の思索／詩作を通じて未来のアメリカへと理想を投射しているという理解にちがいはない。

してみるとギンズバーグの「スーパー」は、ホイットマンの未来に投射されたアメリカの理想が一九五五年のカリフォルニアにいまだ実現されておらず、そのことに『草の葉』の詩人が当惑する姿を読んだ詩だといえるだろうか。ただし「僕」は当初、ホイットマンが食料品であふれかえるスーパーマーケットからどんなカタログを紡ぎ出すのか期待していたし、スーパーを出て街をさまよい出すホイットマンを呼び止めようとする際、「僕はあなたの本にふれ スーパーマーケットでの僕らの冒険を夢みたなんて馬鹿みたいに感じます」と心のなかで嘆いてみせるのだ<sup>18</sup>。つまり、「僕」の半面はギンズバーグだが、もう半面は現代アメリカ社会の物質的繁栄を享受する純朴なる中産階級の間人であり<sup>19</sup>、そういう「僕」を通じてギンズバーグは、ホイットマンのアメリカン・エレミアを間接的に反復しているのである。

以上、われわれは初期の詩二編を読んで、ギンズバーグとアメリカン・エレミアの関係を検討してみたが、バーコヴィッチの指摘とは異なり、すくなくとも彼は反エレミアとはいえないだろう。二〇世紀の詩人はヘンリー・アダムズのようにアメリカの理想など嘘つばちだとは考えていない。むしろホイットマンと同じく、アメリカのザインとゾレンの乖離を憂い、しかしホイットマンとはちがいで、両者のあいだで宙づりになり、そのことに耐えているように思われる。そして「パターソン」と「テレビ」でギンズバーグが示

した態度もこの「宙づりに耐える」姿勢の変奏として解釈できよう。前者では自己をイエスになぞらえると同時にアメリカの大地とも同一化する詩行のなかには自己の死と引き換えにアメリカの再生を願う贖いの心情がかすかに感じ取られるし、後者では終末的幻視のあと、「僕」はドラッグの感乱から醒め、背中の痛みを感じながら真夜中に二本の電報を受けると、その指示に従い電極棒を頭に差して夜のしじまに広がる人々の孤独な、しかしよるこびの感じられる心の空洞に耳を澄ませるのだ。ギンズバーグはこのとき、多くの人々とともにけつして愉快ではないアメリカの現実に耐えている。

なるほど「宙づり状態に耐える」というのはたしかにエレミア的ではない。理想を未来に投射して、その実現に向けて力強い一步を踏み出そうと鼓舞するのがエレミアであるからだ。ただし、これらの詩において理想と不安の微妙な均衡のうえにたっていることは間違いない。「テレビ」においてさえ最終行の“darkness”と“bliss”の一語で形容される——、その点において彼はエレミア的だと言いうるのであろう。この「宙づりになった状態」については第五節でさらに考えるところ、次にわれわれは彼の散文を読むことにする。これらの詩とはちがいにここにはエレミア的言辞がはっきりとみられるからだ。

### 三. 散文のなかのギンズバーグ

ギンズバーグは自伝的エッセイ、ドラッグに関するもの、詩人論、自詩の解説など数多くの散文を残しているが、政治的なものもいくつかある。とりわけベトナム戦争反対運動に接近してからは反戦的メッセージが多くなる。ここではむしろもっと早い時期に書かれた「詩、暴力、そして震える子羊たち」を読むことにしよう。<sup>20</sup>。アメリカの現状分析と未来にかける姿勢が鮮

明に示された、つまり彼の考える「アメリカ」と（アメリカ）を端的に示した根源的なエッセイ、言葉を換えていえば彼のアメリカン・エレミア的特質のあらわれた重要なエッセイだからである。<sup>21</sup>。

現在、人類に対し「機械的意識」を押しつけようとする「広大な陰謀」が働いている。その陰謀はすべての人間に同一に内在する人間的感性を、すなわち「創造主と分かちもつ」あのユニークな部分の表出を殲滅しようとしており、最近の歴史はその記録である。ギンズバーグはそうこのエッセイを切り出す。しかしそうした「陰謀」の実態はマスコミの情報コントロールによって隠されており、われわれの多くはそのことに気づかない、と語る。「機械的意識」とは、あらかじめ決められた事柄に決められたようにしか反応しない意識ということだろう。だから「もつとも深くもつとも個人的な感受性と現実の吐露」は「禁ぜられ、ばかにされ、抑圧される」。

同時に、とギンズバーグは語る。同時に、「アメリカの集合意識」には「裂け目」があり、突然「広大な全米無意識の冥界」をつらぬく「洞察」の光が刺す。そこは「神経ガス、大量死の爆弾、悪意に満ちた官僚機構、秘密警察」等々に満ち満ちている。マスメディアは「公式に容認可能な」情報しか流さないの、だれもこの秘密の無意識世界がどの程度の広がり深さをもつか知らない。アメリカは「神経衰弱」を引き起こす寸前である。

ここでギンズバーグは詩とドラッグの重要性を訴える。詩は個々人の、そして世界の「秘密の魂」、すなわち「広大な全米無意識の冥界」を照らす洞察の記録である。サンフランシスコの詩人たちは「自分たち自身の本質」諸政府の本質、「神の本質」を見透した人々である。いっぽうで大多数の人々はマスメディアのつくりだすステレオタイプをなぞって彼らの洞察を否定する。歓喜、絶望、預言、自殺などさまざまな出来事がおきる。警察が介入し、ハリウッド映画産業までマスメディアに協力して事件をステレオタイプにゆがめて扱う。また、詩人たちは意識を拡大して上述の洞察を与えるため

にマリワナなどのドラッグを使用するが、これはほんとうは有害ではない。ところがこれらを使うと警察に逮捕されてしまう。麻薬やヘロインを使うと終身刑や死刑の恐れがある。「アメリカで麻薬常習者であることは、かつてナチスドイツでユダヤ人であったことに酷似している」。

このように説明するとギンズバーグはただの薬物犯罪者のようにみえるかもしれないが、彼はアメリカの殺伐として抑圧的な政治風土を平和主義のそれに変えたいと願い、ドラッグにはそういう効用があると信じて書いているのだ。詩人は一九六六年に連邦議会の公聴会においてLSDが健康に無害であり精神に安定と平安を、社会に調和をもたらすことを、数々の学術論文を引用しながら大変礼儀正しく紳士的に弁述している。<sup>220</sup>

ギンズバーグは再度、訴える。中央政府の鼓舞のもと、全米各州の警察組織がドラッグに関する虚偽で一般人を洗脳し、魂の探求の破壊を先導している。こういう状況で、同性愛者、平和主義者、金のために働きたくないもの、武器を作ったり軍隊にはいつたりしたくないものたち、ぶらぶら過ごし、あれこれものを考え、ヴィジョンをつかむ人たち、民主主義に靈感をうけ、公共の場で真実を話すものたち等々——「アメリカにおいて」こういう人々の心の運命はどうなるのか。この国の経済の大部分は戦争への精神のかつ機械的準備と繋がっている。

「仲介人の群れ」もこの事態に手を貸しているとギンズバーグは指弾する。「仲介人」とは、「ジャーナリスト、商業出版社、書評家の面々、大勢の文学部教授連中のことだ」と詩人は列挙する。彼らの活動によって詩は憎まれ、魂の探求など神話に過ぎないとされ、サンフランシスコにつかの間輝いた詩的ルネサンスはさまざま悪意の中傷にさらされた。こうギンズバーグは嘆いている。

このように要約すると、誰しもこのエッセイが内容の点で「テレビ」と類似していることに気づくだろう。ただし詩が言葉の乱反射的眩暈であるの

に対し、散文はきわめて理知的で抑制のきいた表現である。そしてこのエッセイには「テレビ」からはほとんど感じとることのできなかったアメリカの理想が（否定形ではあるものの）明示的に言及される。すなわち、物質主義にはしり、警察国家のアメリカ、セックスと魂を欠いたアメリカ、偽りの権威像をひたすら守るアメリカの現実、ホイットマンの同志たちの「荒々しくも美しいアメリカ」ではない、ヘンリー・デイヴィッド・ソローやウィリアム・ブレイクの呈示する「歴史的アメリカ」ではないという具合に、である。アメリカとは個々人の魂が独立している世界のことであり、世界のあらゆる抽象的な官僚機構と権威主義のお役所界が束になってもかなわぬほど広大で威厳に満ちている。こうギンズバーグは高らかに訴える。

最後に詩人は「何人の偽善者がこのアメリカにいるのか」以下、十一個の疑問文を連ねてこのエッセイを終えるのだが、その一つ一つを列挙する必要はないだろう。アメリカは真実に目覚めるべきであり、性的に金銭的に人々を束縛することをやめ、不安と恐怖をとりのぞき戦争をやめるべきだと訴えるのである。

こうしてみると、このエッセイのギンズバーグはきわめてアメリカン・エレミア的だと評価できるだろう。なるほど、ここでもピューリタンの禁欲氣質を認めることはできない。同性愛やフリーセックスやドラッグの合法化をもとめる姿勢は、聖書ときびしく向きあう清教徒の原罪意識そのほかとまったく折り合うものではない。しかしこのエッセイには「創造主」という言葉が冒頭のパラグラフから出来る。それは展開部においても「神」といいかえられたりしながら三回反復され、わずか三文・四行しかない最後の一文節のうちに三度くりかえされ、エッセイ全体で七回言及される。最後の一文はこうである。「神の栄光をうたい世界の塵芥のなかで涙を流す詩の美しい顔に唾するのはだれか」。つまり、警察国家的現在のアメリカが抑圧する同性愛やフリーセックスやドラッグは、創造主の意思に連なる、享受されてし

かるべき全き自由の一断面だとギンズバーグは考えているのである。

アメリカの現実と理想の対立的構図はここにあらからである。そしてギンズバーグはそれをホイットマンの理想、ソローやブレイクのアメリカの理想に重ねている点も見逃してはならない。彼らが一様に語ったのは、旧世界の貴族主義的封建的諸制度とそれを正当化する文学にかえてアメリカの神の意思の実現に向けた民主主義とそれを讃える未来の文学の称揚であった。個人の自由と愛国心が魂の次元でひとつになった、ホイットマンの言葉をもちいるならば「宗教的民主主義」<sup>23</sup>を理想としていたのであり、ギンズバーグもまたその伝統に自己を連ねているのである。これはつまりアメリカン・エレミアの伝統に連なることにほかならない。このエッセイの副題が「独立記念日のマニフェスト」となっていることが何よりもそのことを雄弁に語っている。

ギンズバーグが反エレミアでないことははや明らかであろう。反エレミアは理想を取り戻すにはもはや手遅れであると嘆いたり、アメリカの理想は偽りであったと絶望したりするのだが、ギンズバーグにそのようなことはない。彼は事態がどんなに悪くとも愛を失うことはない。それがこの詩人のもっとも奥深くにある本質である。第二節で論及した詩はこのエッセイの主張の正当性を実践で示し例証した成果の数々であると評価できよう。以上、彼の重要なエッセイのひとつを読み、詩人のエレミア的性質を明らかにした。最後に我々は「吠える」を読んで、ギンズバーグがどれくらいアメリカン・エレミア的であるかピンで留めることにする。

#### 四 「吠える」を読む その一

一九五五年一〇月七日、シックス・ギャラリーでのあの有名な朗読以来、猥褻裁判のおかげもあって<sup>24</sup>、「吠える」は今では英語で書かれたもつとも

有名な詩のひとつになった。とはいえ、ピンで留めるためにはその外形と内容について丁寧に読んでゆく必要がある<sup>25</sup>。

この詩は三部から成り、これに「吠えるの脚注」（ほかのパートと異なり番号は付されていないが、以下、便宜的に「第四部」、あるいは「脚注」と表記）が添えられ<sup>26</sup>。第一部はだれもが知るとおり、「僕は見た僕の世代の最上の精神が狂気によって破壊されるのを……」ではじまるかなり長いパートである。「最上の精神」がいかに「破壊され」たか、具体的な様相が六〇個の関係代名詞“who”によって並列的に途切れることなく陳列され、全集版で五頁強におよぶ長い一文でいっきに語られる。各行は異様に長く「ぶら下がりインデント」が多用され、なかには五個のインデントをぶら下げた一行もある。第二部はそうした「最上の精神」を破壊した元凶が「モロク」と名指しされ（あるいは象徴的に名づけられ）、あらゆるものに浸潤し、私をはじめ万人を取り囲んでいるさまが一頁強ほど描かれる。「モロク」の名は三二回くり返され、それが詩に峻厳なリズムを刻んでいる。第三部はロツクランドの精神病院に入院するカール・ソロモンに対し<sup>27</sup>、「僕は君とともにある」と十九回にわたり呼びかけ、そのたびに関係副詞“where”をもちいて接続し、二人にまつわるよしなし事を追想する。そういう詩行の反復が一頁強にわたって展開する。そして「脚注」は「聖なるかな！」という連呼とともに、ありとあらゆるものが「聖！」であるとして一行にわたって叫ぶ。“holy”の一語は七七回連呼される。

今度は内容について見てゆこう。第一部が描出するのは五〇年代アメリカの物質主義的繁栄社会からドロップアウトしたギンズバーグの友人たち、知己たちである。「僕は見た」ではじまるとおり、冒頭はそうした人々の生き様を一定の距離をとって客観的にえがいてゆこうとするが、早くも三行目において「天使の頭をしたヒップスター」とか「夜の機械仕掛けにおける星々のダイナモ」<sup>28</sup>などという自然と人工の二重写しになった幻覚的詩行

が出来して、その客観性を保証する距離はみるみる失われてゆく。上述した長い詩行はひとつにはホイットマンの流儀にならない伝統的詩型にさからう仕草であるが、「僕」の息の長さが一行の長さを決めるといふこの詩型は「語られる人々」と「語り手」との一体化をもたらし、さらには読者をも共感に巻きこんでゆく。「最上の精神」はお湯も出ないような貧しく低賃料のアパートに住み、定職につかずその日暮らしのような生活を送り、カフェや場末の酒場で朝まで酒を呑み、広大なアメリカをはてしなく放浪し、ときにはドラッグを求めてメキシコにまで繰り出し、ジャズに心酔したりマリワナを吸ったり、戦争の恐怖にふるえて部屋に閉じこもったり、幻覚を見ながら屋根からあるいはブルックリン橋から飛び降り、トラックの下に身を投げ出し、パセニック川に飛び込み、自殺未遂をやらかし、一日中女の恋人、男の恋人、ときには複数でセックスをおこなったり、ダダについて行儀よく講義をおこなう教授にポテト・サラダを投げつけたりと、およそこれまでの詩には描かれたことのないような生活の細部描写が空前の分量で反復される。そこから逆照射されるのは、アメリカの物質的繁栄とそれを支える「中産階級の価値観」(A/180)である。「スーパー」でえがかれた夜のスーパーマーケットで缶詰や新鮮な果物を買って求める家族連れの価値観である。そうした「豊かさ」は二度の世界戦争をへて達成されたにもかかわらず、彼らは一様にそのことに鈍感であり、「最上の精神」にははつきりときこえるというのに、星々のかがやく夜空にひびき渡る爆撃機の轟音が彼らの耳にとどくことはない。彼らにとつて詩とは弱強五歩格の無韻詩のことであり、このような詩行は雑音にすぎない。ひたすら社会の歯車として社会秩序の安定に貢献し、その見返りとして安穏な生活を送れることに疑問を抱かず幸福を感じている。彼らは「最上の精神」のように権威と体制に疑問をつきつけないので、警察に「逮捕され」ることはない。

「最上の精神」はドロップアウトすることを目的とするわけではない。ジ

ヤズもフリーセックスもドラッグも意識の拡張と「永遠」「絶対的実在」の探求をめざすものである。だから彼らは禅にいそしんだり、「プロチノス、ポウ、十字架のヨハネ」を読んだり、テレパシーやカバラに関心をもったりする。なぜならカンザス州を放浪しているとき「宇宙が本能的に彼らの足元で震動したから」である。

第一部はこうした内容の詩行が湧き水のようにダイナミックに繰り出される。あたかも連想の赴くままにといつた仕様で奔流のごとく発出される言葉の高揚はやがてカール・ソロモンへの哀惜を語る数行で極点に達すると、終結部において突然、次のような別の次元に飛躍する。

並置されたイメージを通じて時間と空間の隙間を夢見てそれに肉体を

あたえ魂の大天使を二つの視覚イメージのあいだに閉じ込め根本的動詞を結合し意識の名詞とダッシュを合体させて**全能にして永遠の父なる神の感覚をもつて跳躍し**

人間の哀れな構文と韻律を創りなおし言葉なく賢明に恥に震えながら貴方の前に立ちねつけられても魂を告白し裸で終わりのない頭のなかの思考のリズムに合わせ

狂人浮浪者天使が時間の中でビートを刻む人知れずしかしずれ来る死のあとに言われるかもしれないことをここに書きとめ

そして立ち上がったバンドの金管楽器の陰でジャズの亡霊の衣服をまとつて再び受肉して愛を求めてアメリカの裸の精神の苦しみを吹いた**神よ神よなぜになぜに私を捨てたまいしかと**サキソフォンの泣き声に込めるとそれは国中の都市を最後のラジオにいたるまで震えさせ

生命の詩の絶対的心臓が彼ら自身の肉体を屠殺して切り出されそれは千年の食に十分なものだ。(CP 138-39; 74-78)

前半がこの詩の詩法について語る自己言及的詩行、メタ・ポエトリであることは明らかだろう。「吠える」は突飛でかけ離れた二つのイメージを合成することで日常的時間と空間の世界に亀裂をいれ、神秘への突破口をつくろうとしている<sup>31</sup>。たとえば「水素ジュークボックスのうえに破滅の運命が割れる音を聴き」などはその好例である。

そして後半では、詩人は命を削って未来のためにこの詩を書き留めたことを訴える。ここで注目すべきは、詩人は「アメリカの裸の精神の苦しみ」をサキソフオンのむせび泣くような音を模して歌ったと述べることであり、さらには「アメリカの苦しみ」をイエスの最期の言葉に重ね合わせている点である<sup>32</sup>。そしてその「サキソフオンのむせび泣き」は全米の隅々にまで響きわたり、千年にわたりアメリカの進路を指し示しつづける指標となるとうたう点である。すなわち、ここには「最上の精神」が破滅するほかないアメリカの現実の悲惨を憂う嘆きと同時に、アメリカの理想がいつか実現されることを志向し未来のアメリカはそれに応えてくれるはずだという希望がこめられているのである。そしてその理想はイエスがそうしたように、すべての人間の生活を救済するとうたうのである。「神よ神よなぜになぜに私を捨てたまいしか」の引用は、現在が不安と希望の均衡点にあることを雄弁にも語っている。こうして終結部の示すところは明らかである。「吠える」の第一部はアメリカン・エレミアの詩だということだ。

## 五. 「吠える」を読む その二

第二部を見てみよう。多くの研究者が指摘するとおり<sup>33</sup>、「モロク」とは第一部でえがいた「最上の精神」を狂気に追いこみ幽閉する物質主義、拜金主義、軍産複合覇権主義のことであるが、第四節でふれたとおり、それはあ

らゆるものを浸食しており、その点「僕」も例外でない。

モロクそいつのなかで僕はさびしく座る！モロクそいつのなかで僕は天使を夢見る！……

モロクそいつは早くから僕の魂にはいつてきた！モロクそいつのなかで僕は肉体のない意識でしかない！モロクそいつに僕は恐怖し自然なエクスタシーをうしなった！……

(CP 139: 86-87)

こうして「僕」は自分もアメリカと世界を墮落させる邪悪な力から自由でないことを自覚する。ふりかえると、「パターソン」や「テレビ」、「アメリカ」と「スーパー」で宙づりになった「僕」、すなわち、お金と権力にへつらう生活を嫌悪し死を願うが自身をイエスの死になぞらえアメリカの大地との一体化を夢想する「僕」、誇大妄想狂的陰謀論の長大な展開から終末の光景を映画の終了にかさねるが夜の「よろこびの感じられる」鼓動に耳をすませる「僕」、タイム誌をこつそり読んでアメリカの体制的価値観を吸収しようとする「僕」、夜のスーパーマーケットに並ぶ物質的豊かさをホイットマンがカタログ手法で賛美することに期待した「僕」は、ここにいう「モロク」に侵された「僕」の表出だといえるだろう。そういう「僕」はときに均衡点にたたずみ、「宙づり状態に耐え」もするが、別のときには右の自覚のゆえにこそ、「自然なエクスタシー」——同性愛、乱交、ドラッグ、ジャズなどが与えてくれるエクスタシー——を求めて「僕」は「モロク」を糾弾するのである。

第二部もまたしかし、ただ単に糾弾するばかりではない。おびただしい呪詛の羅列は最後のところで反転し、異様な高揚感を生みだし、幻視的瞬間の高みに達する<sup>34</sup>。

ヴイジョン！予感！幻覚！奇跡！エクスタシー！アメリカの川を下った！

夢！崇敬！光明！宗教！舟満載の繊細な無駄話！

飛躍！川をこえて！むち打ちと十字架！洪水を下った！絶頂！顕現！絶望！一〇年の動物の叫びと自殺！精神！新しい愛！狂気の世代！時間の岩の上に落ちる！

川のなかの本物の聖なる笑い声！かれらはすべてを見た！荒々しい眼！聖なる叫び！かれらは別れを告げた！屋根から飛び降りた！孤独にむかって！手を振りながら！花をもって！川に落ちる！街路のなかに！

(CP 140: 89-92)

錯乱と紙一重の拡張された意識はすべての感情、すべての思考、すべての興奮と絶望を「アメリカの川」に投企する。「アメリカの川」とはアメリカの未来にほかならず、モロクの呪縛から解放された希望の世界のことである。「最上の精神」はアメリカの現状に「別れを告げ」「新しい愛」と「本物の聖なる笑い声」を求めて「屋根から飛び降り」未来のアメリカにむかって跳ぶのである。この跳躍は疑いもなくアメリカン・エレミアの跳躍である。

では、第三部はどうか。カール・ソロモンによびかけ、「僕は君とともにいる」とくりかえす第三部では、これまでの速射砲的言葉の轟音は鳴りをひそめ、ささやくような語りが特徴的である。「where」で接続して「君」のなしたことを回顧する詩行は最初の五回は短いのだが、語りの没入と興奮を反映して次第に長く饒舌に伸びてゆく。やがて「病院の医者たちこそ狂っていると糾弾しファシスト国家のゴルゴダを打ち倒すヘブライ人の社会主義革命を企む」だとか「超人の墓から生きた人間イエスを復活させる」といった

秩序——精神病院は抑圧的アメリカの秩序体制の象徴である——の崩壊と暗転を期待するユダヤキリスト教的修辭につづき、ここでも詩行は次のように跳躍する。

僕は君とともにロックランドにいる

そこで僕たちは電機ショックで昏睡状態から目覚める僕たち自身の魂の飛行機が屋根の上でたてる轟音によって飛行機は天使の爆弾を落としに來たのだ病院が自ら光を放つ想像の壁が倒れる ああ瘦せかけた軍勢よ走り出よ ああ星条旗の慈悲の衝撃よ永遠の戦争がついにきた ああ勝利よきみの下着を忘れよ僕たちは自由だ

僕は君とともにロックランドにいる

僕の夢のなかで君は海の旅から岸にさがり滴をしたたらせアメリカを横断するハイウェイを泣きながら歩き西海岸の夜に僕のコテージの扉にいたる

(CP 141: 110-11)

ここに夢想された黙示録的終末の光景はいつぼうで第二次世界戦争と朝鮮戦争でアメリカがおこなった空爆を再現してその狂気をえがき、同時にもういつぼうでその空爆をほかならぬアメリカ自身の秩序のうえに落とし「狂人」を幽閉の壁から解放する恍惚の光景である。腐敗し墮落した抑圧的「アメリカ」を破壊し、來たるべき勝利と自由の（アメリカ）を祝福するこの二行は、すぐれてアメリカン・エレミア的である。解放されたソロモンはニューヨークからアメリカ大陸を横断し、はるばるパークレーの「僕」に会いにやってくる。「勝利よきみの下着を忘れよ」というのだから、ソロモンも「僕」もちろん裸である。このあともちろん二人は唇を重ね、ベッド

で抱きあって寝るのである。ホモセクシユアル・セックスが全面的に受け入れられる社会がこの詩の理想のアメリカであることを最後の一行は明確に示している。

最後に「第四部」を見ておこう。「脚注」はまさしく「脚注」らしく「本詩」の全体に通底する全的肯定の万物万象讃歌である。「すべての物は聖！すべての人は聖！あらゆる場所は聖！あらゆる日々は永遠のなか！すべての人が聖！」ということだ。「舌も陰茎も手も尻の穴も聖！」とさえうたう。「モロク」のせいで失った肉体を、ここでは取り戻している。

こうして詩はじつに雑多な事物を列挙して聖列化するのだが、そのなかには友人たち、精神病院にいる母親、ジャズバンド、マリワナ、ヒップスターはもちろん、第二部でモロクの換喩に使用されたニューヨークの「摩天楼と舗道」まで含まれる。さらには「さびしい破壊神」や「本詩」の主張にしたがうならば唾棄されてしかるべき「中産階級の巨大な子羊」さえもが「聖！」なるものとして列挙されるのだ。第二部ではあらゆる事物のなかに浸透し万物を腐らせる「モロク」の暴政を指弾したが、「脚注」ではそういうアメリカの墮落した現状のなかに未来の希望の可能性が宿っていることを確信しているのである。再度確認すると、第一部、第二部、第三部はそのすべてにおいて終結部で次元の跳躍をなし、栄光の未来を幻視する。「脚注」はその瞬間を保証する契機が万物に内在していることをうたっているのがある。だから「第四部」は「四次元は聖！」と意識の拡張をたたえるいっぽうで「モロクのなかの天使は聖！」と祝辞を徹底する。聖化される友人たちにまじって「アレン」もまた「聖」と形容される。

「脚注」の最後の二行はこうである。

赦免は聖！憐憫！慈善！信仰！聖！我らのもの！肉体！苦受！寛

大！

魂の超自然なる超明敏で知的な優しさは聖！

(CP 142: 125-26)

ここに列挙された属性こそは未来のアメリカが実現すべき社会の属性だと「僕」すなわちギンズバーグは考えている。だとするならば、原詩における最終詩行の最後の単語 *The soul* はアメリカ人ひとりひとりの魂であると同時に、人類全体の〈魂〉でもあり、第三節で読んだエッセイ「詩、暴力、そして震える子羊たち」のなかで言及された「創造主」の〈魂〉でもあるのだろう。それは地上から戦争を消し去り、同性愛もフリーセックスもドラッグも許容する寛大な社会の魂にほかならない<sup>37</sup>。

以上、二節にわたって「吠える」を読んできた。饒舌な細部が一貫してうったえるのは、「最上の精神」を抑圧する「アメリカ」の現実に対し、「僕」の信じる〈アメリカ〉の理想を掲げることであった。「本詩」のそれぞれにおいて、ホイットマン的カタログ手法による友人知己の「破壊」の展開から、あらゆる人間あらゆる事物に巣くう「モロク」の展覧から、そしてカール・ソロモンの足跡回顧の列挙から、愛に満ちた理想へと跳躍するさまは見てきたとおりである。そして「脚注」は抑圧的アメリカの現実にもかかわらず、あらゆる事物と人間に理想実現の種子がやどることを「聖！」と叫んで確認する詩である。ここに呈示された理想は先ほど述べたとおり同性愛もフリーセックスもドラッグも許容する寛大な社会である。それはもちろん、中産階級の価値観、常識社会の価値観とは相容れるものではない。ピューリタニズムの厳格主義とはなおさらである。しかし現実と理想の弁証法的関係から後者へと跳躍する論理と指向性は両者に共通している。その論理と指向性にひとつの名前をあたえたとすれば、アメリカン・エレミアという以外にない。したがって、結論はこうだ。アレン・ギンズバーグはアメリカン・エレミアだ！

1 パーコヴィッチの本のタイトル、彼の議論、その後の研究者たちの用語を正確にうつすならば、「アメリカン・ジェレマイアッド」であるが、如何せん長いし字面が汚いので、「エレミア」と表記する。

2 日本でも2000年に中央大学人文科学研究所が『イデオロギーとアメリカン・テクスト』という書を刊行し、諸氏がコットン・マザーやメルヴィルなどと「アメリカン・エレミア」について論じている。

3 三宅昭良「エズラ・パウンドのマイนด์=セット——彼はアメリカン・エズラか」『Ezra Pound Review』第二号 日本エズラ・パウンド協会 一九九九年 一—一八頁。

4 Andrew R. Murphy, *Prodigal Nation: Moral Decline and Divine Punishment from New England to 9/11*, (Oxford UP, 2009).

5 Bercovich, p.204. 反エズラの定義は p.191 を参照。

6 Murphy pp.8-9:117-18:138-41.

7 Bercovich p.138 を参照。そこにおいてパーコヴィッチは「a new version of the jeremiad」と記しており、「アメリカン・エレミア」には二種類あることを明確に示している。

8 本パラグラフは三宅一三—一四頁の記述と重複する点がある。

9 ギンズバークは仏教やヒンズー教など東洋思想に傾倒した。したがってアメリカン・エレミアではないのではないかと、というふうにかテゴリカルに否定する議論が考えられようが、そういう傾倒ならばエマソンにもソローにもホイットマンにも見られた。彼らにとつて東洋思想はアメリカの理想を宇宙論的次元で展開する際の腐葉土であった。本論では丁寧に論究することはしないが、おそらくはギンズバークにも同じことがいえるだろう。少なくとも、その点をもつて性急に彼はアメリカン・エレミアでないとはできないと考える。

10 たとえば、「聖歌I」「聖歌II」「聖歌III」などは本論で採りあげた詩とは異なり厳かで清らかである。それぞれ CP pp.26, 28-30, 163.

11 あらためて言うこともないが、彼の伝記はどれも、詩の細部のもととなつた無数のエピソードを紹介している。また、Morrison は詩人の特徴を「The extremely personal nature of Ginsberg's works as well as the prophetic voice」と評破しつつ。Morrison p.83 を参照。

12 ギンズバークは若いときにしばしば自殺の衝動に駆られている。たとえば、コロンビア大学の学生時代、親密な友人のルシアン・カーがカメラを刺殺した事件のときにはひどく落ち込んで、遺書のようなメモ書きをしたためている。詳しくは *I Celebrate Myself* pp.53-54 を参照。

13 ギンズバークの詩はすべて *Collected Poems 1947-1997* から引用し訳出した。その際、ブロック引用にはページ数、行数をこの順番で表記した。本文中の語句の引用については、煩瑣を避けるためにページ数も行数も示さないことにした。なお、本論で引用した詩には柴田元幸氏、諏訪優氏、富山英俊氏、原成吉氏の翻訳がある。訳出に当たつて参照し、訳語と語順の選択において大いに啓発され、積極的に採り入れたことを記して感謝する次第である。

14 最後の一行のオリジナルは「America I'm putting my queer shoulder to the wheel.」のだが、これは「to put one's shoulder to the wheel (一生懸命働く)」という慣用的表現を利用した一行である。この慣用句は、沼にはまって動かない荷車を懸命に肩で押す動作から来ている。ということとは、同じく「the wheel」とはアメリカのことであり、「業」は近視でサイコパスでゲイだが、立ち往生するアメリカをぬかるみから救い出そうと懸命である、と訴えているのだ。

15 興味深いことに、この詩では「ソ連」を指す代名詞は「彼女」であるが、「アメリカ」を指すときには「彼」を使う。

16 丸カッコ内は筆者による補足であつて原文にはない。

17 この万引きを警戒する「店の探偵」は、絶妙に中産階級の価値観をあらわした事象ではないだろうか。

18 この丸カッコは原文のままである。

19 1954年、サンフランシスコにおいてギンズバークは市場調査員の仕事をしながらある女性(子供のいる離婚前の既婚者)と暮らしたはじめ、「快適なアメリカ中流階級の生活のようなもの」(Miles 170)に浸った時期がある。Miles pp.167-75 を参照。

20 原題は「Poetry, Violence, and the Trembling Lambs」。DP は *The Poetics of the New American Poetry* に収録されているが、大文字の使用、段落の分け方の点で両者に違いが見られる。

21 以下に引用をまじえながらエッセイを要約するが、煩瑣になるのを避けるため、一々引用の頁を明記はしない。エッセイは大変短く、DP ではわずか三頁である。

22 Statement of Allen Ginsberg, Poet, New York City Hearings Before a Special

Subcommittee of the Committee on the Judiciary—U. S. Senate." *DP* pp.67-79)を参照。念のために付記しておくが、このように合法化の言論活動をおこなうのは自由であるし尊重されるべきだが、筆者はギンズバーグをはじめビート派の作家たちがしばしばそうしたように薬物に関して法を犯すこと、創作の際にドラッグの類いに頼る点には反対であり、嫌悪を感じるものである。

<sup>20</sup> "Democratic Vistas" *PWW* p.445.

<sup>24</sup> 有名な朗読会と猿蓑裁判については、Miles pp.190-95, 224-25, 229-30 / *Celebrate* pp.208-10, 218, 236-43 / *The Typewriter* pp.101-110, 122-33 『吠える草稿』 pp.165-68、169-174などを参照。

<sup>25</sup> 「吠える」は *GP* の pp.134-42頁に収録されている。

<sup>26</sup> 「脚注」を別の詩と考える解釈もあるだろうが、ここでは「吠える」の一部としてあつかう。「脚注」と題されているが、また「添えられている」と書いたが、「本詩」の完成後に書かれたわけではない。『吠える草稿版』の詩人の説明によれば (p.97)、「おそらくシンククス・ギャラリーでの(未完成版の)朗読のあとに書かれたらしい」。

<sup>27</sup> カール・ソロモンとの出会いについてはMiles pp.117-24頁を参照。Tyrell pp.94-95も有益である。それらによると、ギンズバーグにジャン・ジュネ、アンリ・ミショー、アントナン・アルトーなどを紹介したのはソロモンである。ただし、彼がロッキランドの精神病院に入院したことはない。「吠える」執筆当時はギンズバーグもロッキランドに行ったことはなかった。『吠える草稿版』p.143の註94を参照。

<sup>28</sup> ギンズバーグのこうしたイメージを自身「無意味なイメージ」と評しているが(Notes p.318)、彼のこの種の特異な語句の組み合わせは主としてシユルレアリスムの影響でもある。Tyrell の *Naked* の pp.212-257を参照。また、詩人の「省略の詩学」についてはGéfinの第8章がよくまとまっている。

<sup>29</sup> ほかにも「彼らがユニオン・スクウェアで超絶共産主義のパンフレットを配っている」と、その声をかき消すように「ロス・アラモスのサイレンが悲しげに鳴り響いた」という詩行が見られる。

<sup>30</sup> このように書く悲壮な感じがするかもしれないが、詩はわざととしてユーモラスに描くこともある。たとえば「ある者は揺られ転がりながら一晩中高気い呪文を書きなぐったが、黄色い朝にはそれらは詩の形式をしたたわ言でしかなく」とか「ある者は時間をこえた永遠に一票を投ずるべく屋根から腕時計を投げ捨て目覚まし時計がその後十年毎日頭の上に落ちてきて」などという詩行が散見される。

<sup>31</sup> 「全能にして永遠の父なる神」はセザンヌの手紙から取られた言葉である。ギンズバーグは大学生時代にセザンヌ研究に没頭したことがあり、画家の〈自然の表層の奥にある実在〉をえがこうとする思想と姿勢と技法の開発に感銘を受け、強い影響を受けた。ギンズバーグのセザンヌ研究についてはPortugésの "Allen Ginsberg" が有益である。

<sup>32</sup> 神よ神よなせになせに私を捨てたまいしかの原文は "ei eli Iamma Iamma sabaotham" であり、これはマタイ伝二七の四六を少し変形したものである。イエスのこの言葉は詩篇二二の一からの引用であるが、ここではその異動、マルコ伝との相違などには深入りしないでおく。

<sup>33</sup> Raskin, p.135

<sup>34</sup> ギンズバーグは早くから "the New Vision" という考えに没頭していた (Miles pp.44-50を参照)。やがて四八年に有名な「ブレイクの幻視」を経験する (Miles pp.98-104)。以後の彼は一貫して意識の拡張と神秘体験を追究し、詩作の根底にすえる。ドラッグの使用も神秘体験をえるための手段である。Paris Reviewのインタビューを参照。研究書としてはPortugésの *Visionary Poetics* が傑出してゐる。

<sup>35</sup> 朝鮮戦争については田中が詳し。

<sup>36</sup> 「吠える草稿版」p.145の註112を参照。

<sup>37</sup> 主として時間的余裕がないので議論の詳細は省略するが、この寛容さはホイットマンが『草の葉』と『民主主義展望』において追究した理想と本質的に同じものである。すなわち、「自己の魂を探求すれば、それは個々人の魂が互いに同一であること知り、それらのひとつひとつが人類全体の魂と重なり、宇宙と同一であることを知るといふことである。その意味で、ギンズバーグはホイットマンの正統な後継である」。

#### 参考文献

- Allen, Donald, and Warren Tallman eds. *The Poetics of the New American Poetry*. Grove Press, 1973.
- Bellefio, Steven, ed. *The Cambridge Companion to the Beats*. Cambridge UP, 2017.
- Bercovitch, Sacvan. *The American Jeremiad*. U of Wisconsin P, 1978.
- Géfin, Laszlo K. *Ideogram: History of a Poetic Method*. U of Texas P, 1982.

- Ginsberg, Allen. *Collected Poems 1947-1997*. HarperCollins, 2007. 本文を註記は付さずは CP を略記。
- . *Deliberate Prose: Selected Essays 1952-1995*. Edited by Bill Morgan, HarperCollins, 2000. 本文を註記は付さずは DP を略記。
- . *Howl: Original Draft Facsimile, Transcript and Variant Versions, Fully Annotated by Author, with Contemporaneous Correspondence, Account of First Public Reading, Legal Stirrings, Precursor Texts and Bibliography*. Edited by Barry Miles, Harper and Row, 1986. 註記は付さずは『吠える羊歯版』を略記。
- . "Notes for *Howl and Other Poems*." *Poetics*, pp. 318-21.
- . "The Paris Review Interview by Thomas Clark." *Writers at Work*, 3<sup>rd</sup> Series. Viking, 1967, pp. 279-320.
- . "Poetry, Violence, and the Trembling Lambs." *Deliberate Prose*, pp. 3-5.
- . "Statement of Allen Ginsberg, Poet, New York City Hearings Before a Special Subcommittee of the Committee on the Judiciary——U. S. Senate." *Deliberate Prose*, pp. 67-79.
- Miles, Barry. *Ginsberg: A Biography*, the revised edition. Virgin, 2000. Viking, 2006.
- Morgan, Bill. *I Celebrate Myself: The Somewhat Private Life of Allen Ginsberg*. Viking, 2006. 本文を註記は付さずは I Celebrate を略記。
- . *The Typewriter is Holy: The Complete, Uncensored History of the Beat Generation*. Free Press, 2010.
- Mortenson, Erik. "Allen Ginsberg and Beat Poetry." *Cambridge Companion*, pp. 77-91.
- R. Murphy, Andrew. *Prodigal Nation: Moral Decline and Divine Punishment from New England to 9/11*. Oxford UP, 2009.
- Portugés, Paul. "Allen Ginsberg and Paul Cézanne and the Pater Omnipotens Aeterna

- Deus." *Contemporary Literature*, Vol. 21, No. 3, Summer 1980, pp. 435-49.
- . *The Visionary Poetics of Allen Ginsberg*. Ross-Erikson, 1979.
- Raskin, Jonah. *American Scream: Allen Ginsberg's Howl and the Making of the Beat Generation*. U of California P, 2005.
- Tyrell, John. *Naked Angels: The Lives and Literature of the Beat Generation*. Grove Press, 1976.
- Whitman, Walt. "Democratic Vistas." *The Portable Walt Whitman*, edited by Michael Warner, Penguin, 2004, pp. 395-462. 本文を註記は付さずは PWW を略記。
- 柴田元幸(訳) アレン・ギンズバーグ『吠える羊歯の他の詩』 スイッチ・パン  
リッシング 二〇二〇年。
- 諏訪優(編訳) 『ギンズバーグ詩集 増補改訂版』 思潮社 一九八七年。
- 田中恒夫 『図説 朝鮮戦争』(ふくむらの本) 河出書房新社 二〇一一年。
- 中央大学人文科学研究所編 『エテオロギーとアメリカン・テクスト』 中央  
大学出版部 二〇〇〇年。
- 富山英俊(訳) アレン・ギンズバーグ『吠える』 『現代詩手帖 特集版  
総特集アレン・ギンズバーグ』一九九七年一月 二二六-二九九頁。
- 原成吉(訳) アレン・ギンズバーグ『カリフォルニアのスーパーマーケット』  
『現代詩手帖 特集版 総特集アレン・ギンズバーグ』一九九七年一  
二月 一六八-一九九頁。
- 三宅昭良 「エズラ・パウンドのマインド・セット——彼はアメリカン・エレ  
メントか」『Ezra Pound Review』第一号 日本エズラ・パウンド協会 一九九  
九年 一-一八頁。